立正大学博物館 館報

万吉だより

MA GECHI NEWS

第 24 号 平成 29(2017) 年 3 月

博物館の基本

館長　時枝　務

博物館が博物館であるためには、収集保管・調査研究・展示・教育普及など、どうしてもやらねばならない仕事が山ほどある。しかも、それらのどれ一つを欠いても、博物館としての機能を全うすることができない。あれもやらなければならない、これもやっておかないといけない、といったあわただしさが、博物館の業務なのである。

展示や教育普及は、目に見えるかたちでおこなわれるので、誰でもすぐに気付くが、とりわけ収集保管の重要性は、一般の方にはほとんど理解されていないであろう。

ところが、博物館の基本は、この収集保管にある。収集活動をやめた博物館は、やめた瞬間から死んだ施設になってしまい、健全な活動を展開することができなくなってしまう。常に新たな発見があってこそ、生き生きとした博物館活動をおこなえるのであるが、その基本が博物館資料である。最近ではデジタルミュージアムなどがあるため、一見みえなくなってしまったが、博物館の生命力はすべて博物館資料から発している。博物館資料を収集するためには、調査研究をおこなう必要があり、そのためには学芸担当の職員は常に学問の研鑽に努めねばならない。調査研究の成果は、展示や教育普及に反映され、さまざまなかたちで博物館の利用者に還元される。

このように、博物館資料あってこその博物館であることを忘れてはならないが、博物館資料を活用できるようにするためには、日常的な整理作業が欠かせない。ところが、この整理作業が、実に膨大な時間を必要とするのである。博物館資料に名前をつけ、収集の経緯や観察結果などを台帳などに記載し、収蔵庫の然るべき場所に保管するという単純な作業なのであるが、実際には実に厄介な作業なのである。しかも、温湿度管理の保存環境が要求され、いつでも必要なときに取り出せることが必要最低条件である。立正大学博物館では、保存環境が実現できていないだけでなく、保管のための整理作業も道半ばである。博物館資料の活用のための収蔵品目録の作成が当面の課題となっている。

限られた予算と人員のなかで、博物館の基本を堅持し、大学博物館としての使命を全うすることは、決して容易なことではない。しかし、立正大学博物館は、長年にわたって収集した考古資料や梵鐘など、個性的な博物館資料を大量に収蔵しており、その活用が大学の内外から期待されているのである。その期待に応えるためには、博物館の基本を踏まえた実践を、日常的に継続していくしかない。それは、茨の道かもしれないが、唯一の王道であることも確かである。

第 11 回企画展報告

小笠原の宝石サンゴ

平成28年10月1日（土）から10月29日（土）を会期として、立正大学博物館第 1 展示室にて第 11 回企画展「小笠原の宝石サンゴ」を開催しました。

展示内容は地球環境科学部の小笠原調査に関する最新の研究成果を伝えるとともに、小笠原の自然について紹介をしました。
展示にあたっては地球環境科学部の学生が主体となり企画・設営を行ないました。

第 1 部では「宝石サンゴの概要」と題して、造礁サンゴと宝石サンゴの違いや分布について実物を用いてまとめました。また、「宝石サンゴは動物」「海からの贈り物　珊瑚の物語」など映像資料を上映しました。

第 2 部では「紛い物と本物」と題し、紛い物の珊瑚を使用したアクセサリーと本物の珊瑚を使用したアクセサリーを展示し、その見分け方や紛い物で使用された原材料についてまとめました。

第 3 部では「珊瑚の文化」と題し、古書や引き札、着物下絵などに描かれた珊瑚と人びとの生活との関係について言及しました。

第 4 部では「宝石サンゴの実物標本」と題し、小笠原及び鹿児島近海産サンゴを紹介しました。また貴重な、漁具に付着したまま成長した小笠原産のサンゴを展示し、ひと際来館者の注目を浴びていました。

第 5 部では「小笠原珊瑚漁の歴史・密漁被害報告」と題し、実際に小笠原と高知県の珊瑚漁で使用されていた珊瑚網や、近年話題になっている小笠原近海における密漁被害について、密漁船で実際に使用されていた珊瑚網を展示しました。

第 6 部では「小笠原の自然」と題し、小笠原の豊かな自然とその保全について、小笠原に生息するウミガメや固有種の紹介とともに言及しました。

企画展の関連事業として 10 月 8 日（土）に岩崎望教授（地球環境科学部）、川野良信教授（地球環境科学部）による講演会を行ないました。講演会では宝石サンゴの文化誌や小笠原の地質と成り立ちについて言及されました。

また 10 月 1 日（土）には宝石サンゴを用いたアクセサリー製作教室を開催し、21 名の方にご参加頂きました。鹿児島・沖縄産のサンゴをレジンに封入し、ストラップやペンダントなど思い思いの作品を製作しました。

会期中は 495 名の方にご来館いただきました。末筆ではありますが記して御礼申し上げます。

見学の様子

アクセサリー製作教室の様子

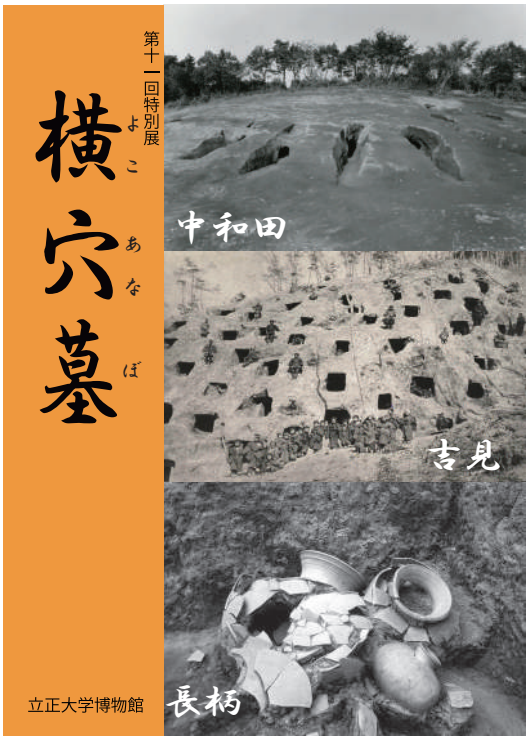
第 11 回特別展報告

横穴墓

平成 28 年 11 月 28 日（月）から 12 月 22 日（木）を会期として、立正大学博物館第 1 展示室にて第 11 回特別展「横穴墓」を開催しました。

立正大学考古学研究室では、昭和 48 年の東京都日野市・梵天山横穴墓群をはじめ、長い年月にわたり関東各地の横穴墓を調査してきました。

今回の展示では学史上著名な吉見百穴横穴墓群（埼玉県比企郡吉見町）のほか、長柄横穴墓群、千代丸・力丸横穴墓群（千葉県長生郡長柄町）、さらには初公開の中和田横穴墓群（東京都多摩市）などを取り上げました。



図録表紙

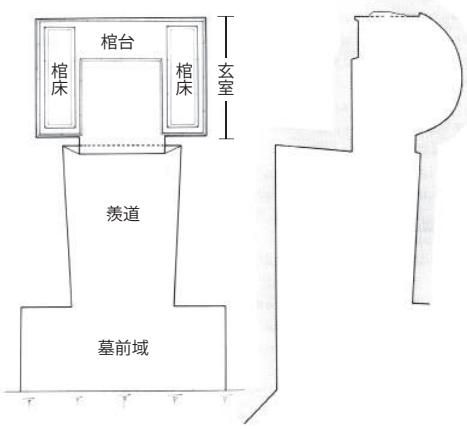
第 1 部では、「横穴墓の概要」と題し、横穴墓の分布、関東地方における横穴墓の様相について明らかにしました。

第 2 部では、「吉見百穴をめぐる人びと」と題し、吉見百穴横穴墓群の発掘調査に携わった当時東京大学大学院生の坪井正五郎と地元の有力者の根岸武香を取り上げました。

関連資料として、坪井正五郎書「百穴」（立正大学考古学研究室蔵）、「武蔵國比企郡西吉吉見村百穴之記」（根岸友憲氏蔵）、モースが根岸家に残した水彩画（熊谷市指定有形文化財　根岸友憲氏蔵）などを展示しました。

第 3 部では「長柄横穴墓群と千代丸・力丸横穴墓群」と題し、千葉県長生群長柄町に所在する 2 つの横穴墓群を紹介しました。

長柄横穴墓群は 36 基の横穴墓が確認されており、千葉県を代表する古墳時代の墳墓として平成 7（1995）年には国の史跡として指定されています。長柄横穴墓群をはじめ周辺地域に分布する横穴墓では、「高壇式」と呼ばれる玄室全体が 2 mほど高く造られた構造が特徴の横穴墓が多数確



「高壇式」横穴墓

認されています。

資料として 18 号墓出土のフラスコ形須恵器（長柄町教育委員会蔵）を展示しました。

長柄横穴墓群と隣接する千代丸・力丸横穴墓群では、37 基の横穴墓が確認されており、そのうち高壇式横穴墓は 31 基と主体を占めています。横穴墓の展開範囲は分布状況から 4 つの支群に区分され、それぞれが異なった集団の墓域として造営されたものと考えられています。

出土遺物は須恵器や玉類、鉄製品が多数出土しており、また線刻画も多数確認されています。とくに第 25 号墓からは特に多くの線刻画が確認されており、両側壁及び天井に馬や人物、弓、矢などが描かれています。しかし、描かれた時期は明確になっていません。

資料として、第 26 号墓出土の須恵器、第 17 号墓出土の玉類・金銅製品を展示しました。

第 4 部では「立正大学が調査した横穴墓群」と題し、本学の考古学研究室と横穴墓研究の関わりについてまとめました。

本展では梵天山横穴墓群（東京都日野市）、坂西横穴墓群（東京都日野市）、熊ヶ谷横穴墓群（神奈川県横浜市）、熊ヶ谷東横穴墓群、中和田横穴墓群（東京都多摩市）を紹介しました。

資料として本展初公開の中和田横穴墓群出土の須恵器 4 点（立正大学考古学研究室蔵）を展示しました。

【関連事業】

平成 29 年 1 月 30 日（月）に、特別展の関連事業として池上悟教授（博物館担当副学長）と松本昌久氏（本学 OB・長柄町教育委員会）による講演会が行なわれました。

参加者は一般聴講生が若干名と本学学生を合わせて 20 名程の方にご参加いただきました。講演内容は今後の横穴墓研究への課題と、保存整備について言及されました。

本展は 1 月 16 日（月）より 3 月 20 日（月）まで、品川キャンパス常設展示にて移動展を開催しました。

特別展講演会の様子

中和田横穴墓出土須恵器（左から 3 号墓・2 号墓・11 号墓・2 号墓）

品川キャンパス展報告

立正大学博物館 15 年のあゆみ

平成28年10月12日（水）から1月16日（月）を会期として、品川キャンパス９号館エントランスにて品川キャンパス展「立正大学博物館 15 年のあゆみ」を開催しました。

今回の展示は、立正大学博物館が開館 15 周年を迎えたことを記念し、さらなる発展への節目とするべく企画されました。

第１部では、「開館までのあゆみ」と題し立正大学博物館の前身である考古学標本室（品川キャンパス）と考古学陳列室（熊谷キャンパス）について当時の様子を撮影した写真をもとに紹介しました。

第２部では、「展示・教育普及」と題し立正大学博物館の常設展示の様子と、博物館学芸員課程講座の館務実習について紹介しました。

第３部では、「これまでの企画展・特別展」と題し平成 15 年から 10 回行なわれてきた企画展・特別展について紹介しました。

第４部では、「所蔵資料の紹介」と題しこれまで当館に寄贈された吉田格コレクションや撫石庵コレクションをはじめ、立正大学考古学研究室が長年の発掘調査で蒐集した資料について紹介しました。また資料として各コレクションを代表する遺物を展示しました。

図録表紙

【関連事業】

平成 28 年 11 月 12 日（土）に、「立正大学博物館 15 年のあゆみ」展関連事業として、品川キャンパスにて池上悟教授（博物館担当副学長）による講演会が開催され、過去展の振り返りと大学博物館としての今後の展望について言及されました。

開館当時の博物館

展示の様子

展示資料の紹介

立正大学博物館の収蔵品は本学考古学研究室が長年の発掘調査によって蒐集した資料や、吉田格コレクションをはじめ考古資料が主体となって構成されています。

平成 23（2011）年 5 月、髙村弘毅氏（前 立正大学学長・立正大学名誉教授）より岩石や化石、世界各地の砂漠の砂など自然関係の資料 82 点を寄贈していただきました。これら資料は立正大学在任中に砂漠を中心に、世界各地の自然環境を調査された際に入手された貴重な資料です。また立正大学博物館を総合博物館化する上で重要な意義をもつ資料として認識されています。

平成 27（2015）年度より寄贈資料の一部を常設展にて公開しています。

【展示資料 1】
アンモナイト
産地：モロッコ・アトラス山脈産
時代：古生代・デボン紀～古生代（菊石類）

アンモナイトは絶滅した軟体動物頭足類の 1 種で、白亜紀に絶滅するまで世界の海洋に生息していました。化石として数多く発見されており 2m に及ぶものもあります。

【展示資料 2】
三葉虫
時代：カンブリア紀～二畳紀（海生節足動物）

三葉虫はアンモナイト同様世界中の海に生息していました。三葉虫は胴体部分が、中央の軸とその左右の房状の部分と、3 つに分かれています。このように、体が「三つの（tri）」、「葉または房（lobe）」 からなる「石（ite）」であるため、三葉虫（trilobite）という名前がつけられました。

三葉虫の特徴でもある、身体を覆う硬い殻の下には何本もの脚がダンゴムシのように生え、海底を這い回っていたと考えられています。

【展示資料 3】
珪化木
時代：古生代～中生代
産地：アルジェリア・サハラのエルゴレラとオゥレフの中間地点（1990 年代に採取）

珪化木とは本来の樹木の組織を残したまま化石化したものです。サハラ砂漠がかつて大森林地帯であった時があったことを証明する貴重な資料です。

【展示資料 4】
有孔虫
産地：アフリカ・アルジェリア　サハラ・タデマイト台地産
時代：カンブリア紀～現在

有孔虫とは石灰岩の風化層で酸化したものです。キチン質、石灰質（サンゴなど）、バクテリアなどで形成されています。

◆展示場所
立正大学博物館　第 1 展示室（1 階）
※そのほかの資料も整理作業が終了次第、公開予定です。

【展示資料 1】アンモナイト

【展示資料 2】三葉虫

【展示資料 3】珪化木

【展示資料 4】有孔虫

NEWS ①

土器焼き実習

土器焼きは例年、文学部史学科の「考古学実習6」（4年生対象）の一環で行なっています。今年度も、平成28年11月4日（金）・5日（土）の2日間熊谷キャンパス敷地内にて行なわれました。参加者は考古学専攻生3名で講師の竹花宏之先生の指導の下、野焼きで土器を焼成しました。

実習に参加した考古学専攻生

NEWS ②

入館者数

平成28年9月1日から平成29年3月1日の間、延67日開館し、総来館者数は724名でした。内訳は、一般の方318名、本学学生294名、本学教職員45名でした。

以上の期間に熊谷キャンパスにおいてオープンキャンパスが2回行われました。その際の来館者数は67名です。

来館者往来

【団体】

・加曽利貝塚土器作り同好会
・立正たちばなホーム
・埴輪研究会

普及活動

◆第11回企画展の紹介

・毎日新聞　2016年10月7日
・埼玉新聞　2016年10月25日
・J:COM熊谷　「まちかどワイド」10月6日
・『宝石の四季』235号

◆博物館の紹介

・中外日報　2016年3月24日

刊行物

平成28年9月1日～3月1日までの期間に、以下の刊行物を発行しました。

◆『万吉だより』第23号（平成28年9月30日）
◆『立正大学博物館15年のあゆみ』
（平成28年10月12日）
◆第11回特別展『横穴墓』
（平成28年11月28日）

資料の利用

平成28年9月1日～3月1日までの期間に、以下の資料貸出を行ないました。

◆新久窯跡A地点第1・2号窯跡　写真
利用機関：入間市博物館
利用目的：入間市博物館主催のアリットフェスタ2016特別展「みつけた！ふるさとのたからもの～文化財が語る地域の歴史～」の展示及び図録掲載

◆壺形土器　写真
利用機関：大田区郷土博物館
利用目的：平成28年度特別展「土器から見た大田区の弥生時代～久ヶ原遺跡発見、90年～」の展示及び図録掲載

見学者の声

当館に寄せられたご意見・ご感想をご紹介致します。今後とも、皆様の声を博物館運営や展示に反映できるよう務めてまいります。貴重なご意見・ご感想をありがとうございました。

◆須恵器のコレクションがもっとほしい。
（21 歳　男性）

◆とても良い環境、ゆっくり見学できた。
（56 歳　男性）

◆歴史を感じました。
（58 歳　男性）

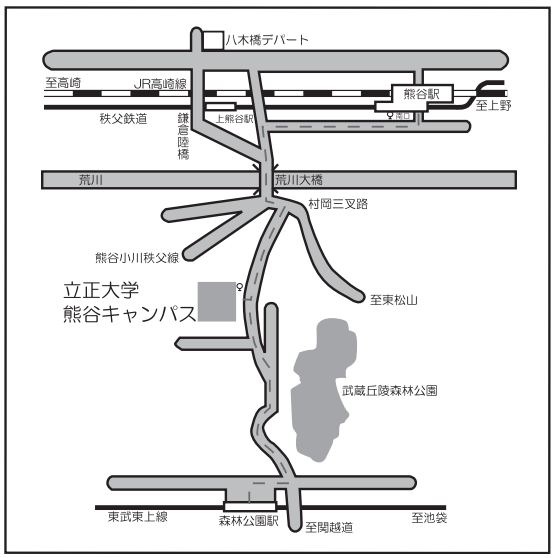
◆良かったです。近くに遺跡が沢山あることがわかった。（76 歳　女性）

◆図録以外にも本をもっと置いてほしい。
（21 歳　女性）

利 用 案 内

所在地：〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL　048 － 536 － 6150
FAX　048 － 536 － 6170
開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）
開館時間：　10：00 ～ 16：00
※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧下さい。
交通機関：
① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 10 分。
②東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 12 分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課（048-536-6010）にご連絡下さい。



あ と が き

2017 年は熊谷キャンパス創設 50 周年の節目の年です。熊谷キャンパスのさらなる発展と活性に貢献できるよう、立正大学博物館もこれまで以上に努力をしていきたいと思います。

次年度も変わらぬご愛顧をよろしくお願いいたします。

題字揮毫　田 淵 観 斎（立正大学名誉教授）

立正大学博物館館報　万吉だより　第 24 号
平成 29（2017）年 3 月 10 日発行
編集・発行　立正大学博物館
〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL 048 － 536 － 6150
FAX 048 － 536 － 6170
E-mail ： museum@ris.ac.jp
URL ： http://www.ris.ac.jp/museum/index

（印刷：アサヒコミュニケーションズ）